島原の乱の使者の戦い（5）

―広島藩・三次藩の場合―

武田昌憲

浅野本藩の活躍

安芸の広島浅野藩、及び備後の三次（みよし）浅野支藩は、両藩共に、島原一揆（乱）発生の時に使者を派遣している。広島の本藩の場合、この時には藩主光晟は江戸にいた。光晟は幕府から派遣された征討使である板倉重昌・石谷貞清のために帆船を多く用意する。浅野氏時代を記した『編年記事』（注1）によると「此時藝藩の先づ應募せし船艦は、重昌及貞清の所用關八端帆船二隻（割注以下同、藩船）軍兵所用八端帆廻船二隻（一は廣島地方の民、市左衛門所有、一は嚴島の民、九右衛門所有）軍場用七端帆船一隻（廣島元柳町の民、善左衛門所有）外に關船一隻・廻船七隻にして、水夫また之に備はる」と対応した。以下、この記事を訳して行くと、この時藩主の光晟は江戸にいた。彼は三次支藩の藩主浅野長治（在江戸）を呼んで、相談している。とりあえず光晟は御小姓長谷川久太郎宗久と大番者頭岡田宇右衛門信成を以て使者として、板倉重昌に付けた。これを浅野藩では「附使者」と呼んでいる。この時長谷川は江戸にいて板倉重昌に従って十一月十一日に江戸を出発。二十二日に広島にいる岡田に伝えて即日共に出立した。この時従者が数十人いた。光晟はまた、大番頭頭小山田利元を「見廻使者」として重昌につけた。利元も広島にいたので、二十五日に命を受けて即夜出発する。二十五日に幕府軍は小倉に到着する。ここで使者の長谷川と岡田はここから帰去を命じられるも、両人は堅く従軍を希望し、重昌からその志を良しとして許される。

十二月二十日の最初の原城攻めでは岡田と小山田は筑前藩の黒田光之の部下に属して参戦。先鋒を務

める。長谷川は立花忠茂の部下に属して先鋒となって参戦した。長谷川は夜陰に乗じて城壁に肉薄するが、敵の弾丸が雨のように降り注ぐ中で、遂に従者の井上源左衛門と同じく銃創を受ける。長谷川に随行していた浪士、小山忠左衛門、山田久次郎、高瓦五郎左衛門及び藩士の子の平山四郎左衛門たちがこれを助けて後退することができた。

翌年元旦、板倉重昌の再度の総攻撃で岡田・小山田共に重昌の先鋒となり、奮戦しつつ城壁に肉薄するが、小山田は斃れ、岡田は銃創を受ける。従者の饗庭十三郎が駆けつけて岡田を背負って退却する。十三郎はこの時十六歳であったが、岡田が残した槍を失うことを恐れたので、十三郎はすぐに取って返して、槍を回収した。（十三郎がこの後どのような恩賞を受けたのか不明である。）この日、幕府軍は重昌の戦死もあり、敗北を喫した。五日には板倉重矩（重昌の子）の命令もあり戦傷の長谷川と岡田が帰藩する。これより先に幕府は老中松平信綱を新たに上使として派遣。この時光晟は御持筒頭津川権兵衛を使者として信綱に付け、また広島から大番頭伴十郎兵衛資徳を「見廻使者」として随行させた。

以上が元旦総攻撃までの経過であるが、「見廻使者」の小山田が戦死し、「附使者」の長谷川と岡田が共に負傷して戦線離脱して、「使者」が全員いなくなった所にちょうど津川と伴が交替できたのは藩にとって幸いであったと思われる。戦闘ができたのも、浪士の人数を含むかわからないものの、「従者数十人」の存在は大きいものがあったと思われる。他藩の使者のように鉄砲隊の派遣の記述はないが、後述のように大筒隊を派遣していて、他藩の「使者」より異彩を放っていくことになる。

この新しい「使者」の津川権兵衛については隣接の藩である萩毛利藩からも頼れる人物としていて、

今度九州ヘノ上使松平豆州侯ヘ芸州浅野侯ヨリ付ケラル使者津川権兵衛ニ志賀茂右衛門ヲ引合、道中何角申談、首尾一同ニ相調マカリ下ルヤウニ命シ玉フ、芸州侯ヨリモ家士松野半衛門ヲ以テ彼ノ権兵衛を茂右衛門ニ引合セノ為ニ伴ヒ来ル（注2）

という記述がみえる。外様の毛利藩が、一応外様で

も幕府の覚えめでたい（信頼の厚い）浅野藩とできるだけ「首尾一同」に歩調を合わせようとするために毛利藩から使者として志賀茂右衛門を派遣するなど、幕府の使者の対応策として、新たに諸藩との連絡のために別に使者を送る気を遣った様子が窺える。

この第二次の二人の「使者」派遣＝出兵の時、先の二回の総攻撃で一揆軍の強力な抵抗を身にしみてわかった浅野藩は、当然、家臣を何人も「使者」に随行させたはずであるが、その規模は記述がないので不明である。ただ光晟は砲術家の奥弥兵衛・同仙兵衛を大筒支配役として砲兵を率いて従軍させ、戸田氏鉄の軍に属して海上から一揆の通路を砲撃し、又その家伝の「火箭」を発射して効果があったと『編年記録』では記す。鉄砲隊の派遣は諸藩の「使者」ではみられるものの、大筒を持って行くという、砲兵隊の参加する「使者」は珍しく、おそらく比較的近距離にある浅野藩らしい処置と思われる。早速海上から射撃したという記述も貴重である。砲兵隊の総勢も記されてはいないが、数十ではなさそうである。家伝の「火箭」の部隊も参加していることからもまた、相当の人数が参加したと思われる。火薬も豊富に準備していたのか、東に隣接している備後福山藩の水野勝成の正式な出兵派遣に応じて、光晟は吉田久右衛門を使者として弾薬二十荷を福山藩に贈呈している。

二月二十七日の総攻撃での記述は以下のようになる。

二月二十七日諸軍一斉攻撃し、城の外郭を破り、続いて牙城に入りて火を放ち、一撃して之を陥れ、教徒は老少となく悉く之を誅し、魁主益田時貞以下の首を梟す、亂平ぎて後ち、光晟は藩船艦の事を以て木全甚兵衛を使者とし信綱・氏鉄に遣はし、船奉行植木三郎右衛門をして關船三十餘艘・荷船五十隻を督して、小倉に到り、凱旋軍の用に供せしむ

ここでは、多くの藩及びその使者が参戦する原城落城戦についての浅野藩の活躍は何も記されていない。全体の状況描写だけで、あたかも傍観していたかのようにみえる。十二月と翌年元旦の二回の総攻撃に参加し、使者の死傷者を出すなど、自藩の大き

な損害を出したことから、使者の先駆けを自粛していたのかもしれない。結果、他藩に押されて華々しい戦闘をしなかったものと思われる。そのかわり、幕府軍の人員や物資の移動に必要な舟の確保に努めていることは記述し、鎮圧の前後の裏方で尽力していることが分かる。

以上の事から、浅野藩では「使者」を数人派遣していながら、その随行の家臣の総数は浪士や砲兵隊を含んでみても数百人は下らないと思われるし、輸送用の船の用意・人夫の手配等も考えると相当の人的物質的出費を提供したことと思われる。

ともかく、一揆討伐の前後で、広島藩が、特に藩主光晟がどれだけ気を使ったかが、よくわかる記事であった。

乱後の処理・エピソード

面白いのは一揆鎮圧・凱旋後の家臣の恩賞とその後日談である。前出引用に続く本文を引用する

光晟は又長谷川久太郎宗久・岡田宇右衛門信成二人の功を賞し、各俸五百石を加ふ、是に於て宗久は千石、信成は千三百石となる、後ち宗久の父志摩死す、光晟其俸二千石を襲がしめ、其功俸千石を収め、組頭と為す、宗久不平なり、以為らく功大にして恩小なりと、十九年十一月遂に其子兵庫助と共に有馬に浴するに託して脱退し、江戸に赴き靡下の士に投じ、又上野に隠る、藩府これを逮捕せんと欲すれども輙く獲ること能はず、乃ち尾・加及肥前の諸侯に拠りて之を索め、遂に幕府の手を以て之を捕へ、二十年七月二十一日宗久をして江戸麻布の藩邸に於て屠腹せしむ、時に年四十なり、

負傷して帰郷した長谷川・岡田両名は加増を受けたものの、長谷川は後に父の禄を継いだ時に加増分も没収されてしまう。そのかわりとして組頭となったものの恩賞がなかったも同然の処置に不満が残り「功大にして恩小なり」として子と共に脱藩してしまう。寛永十五年の一揆鎮圧から四年後の十九年での出来事であった。藩は捜索するがどうしても捕捉できず、諸藩の力、そして幕府の手によってようやくこれを捕える事ができ江戸藩邸で切腹させることが

できた。藩からすれば幕府にも知られ、自慢できない後味の悪い幕引きとなった。こののち長谷川宗久の子兵庫助も捕えられて同じく切腹させられてしまう。宗久切腹の翌二十二日には浅野図書・溝口五右衛門は共に宗久の責任を問われて所領没収のうえ後に切腹を命じられる。宗久の従弟の長谷川角右衛門ならびに今中吉之進・浅野久五郎も亦宗久の事に関して責任を問われて、禄を没収されている。

島原一揆の使者として参戦して恩賞を戴いても、それが後に不満の原因となる後日談を記述するのは、他藩にも見受けられる（注3）点、共通するものがあるので注意しておきたい。たとえば岡山藩の場合もそうであるが、この一揆鎮圧で恩賞を受けた人には、それが逆に名誉なことではなく、却って災いとなり、不幸に陥る家も多いようである。藩の恩賞の不備が原因であるが、この点編集者も興味が尽きない事件であった。

三次支藩の記録

三次浅野家は本藩主光晟の庶兄長治が五万石で寛永九年（一六三二）十一月に分知されたばかりであった。本藩の安芸国に対して領地は備後国三次である。

『三次分家済美録』（注4）の中の「鳳源君御伝記巻之三」に使者の記事がみえるので引用してみる。

十一月（日欠）松倉長門守重次君（肥前国島原城主）御領分吉利支丹一揆蜂起御起居城島原へ（案するニ島原ハ高来郡ニあり諸書ニ高来城ハ或ハ原城ともあり従ハす）押掛ケ候趣江戸へ註進有之為　上使板倉内膳正重昌君石谷十蔵貞清殿（御目代）御越ニ付同所へ為御使者南部太郎右衛門（重之御馬廻）被遣（案するニ引用ゆる系図ニてハいつれへの御使者といふ事詳ならすといへとも此時　玄徳公よりも本文御両方へ御使者岡田宇右衛門信成長谷川久太郎吉重等遣されしニよれハ太郎右衛門も御同様之御使者なりし事疑なし故ニ本文の如く記す但し此時　鳳源君御在府故江戸より遣されしカ又ハ三吉より歟其事ハ詳ならすさて翌年ニ到り重而　上使御下り之節　玄徳公よりハ御使者伴十郎兵衛資信建部清

兵衛某追々遣さるといへとも　鳳源君よりハ外ニ御使者遣されし事見る所なく前後とも太郎右衛門壱人ニて相済シ事ニや詳ならす）翌年戊寅正月尚亦為　上使松平伊豆守信綱君戸田左衛門氏鉄君（美濃国大垣城主）御越ニ付太郎右衛門儀も玄徳公御使者同様相詰罷在（案するニ本文上使衆へ御進物幷ニ御使者勤の事其後罷帰りし事等都て詳ならす島原一挙［ママ］上使御上下等の事　玄徳公の伝ニ委し併せ見るへし）

「鳳源君」は三次藩初代藩主の浅野長治のこと。「玄徳公」は広島本藩浅野家の藩主光晟のことであり、長治の弟に当たる。鳳源君長治は弟の本藩に頼る形で使者は南部太郎右衛門重之一人だけを派遣しているようだ。本藩派遣の使者岡田宇右衛門信成、長谷川久太郎吉重と行動を共にし、本藩の指示を受けていたと思われる。板倉重昌について行っていたことから、十二月と元旦の総攻撃にどう関わったのか、本藩が戦闘に参加し、岡田・長谷川が二人とも死傷して「使者」の役目を果たしていないだけに興味があるが、何も記されていない。本藩から続けて津川権兵衛や伴十郎兵衛の「使者」が派遣されたが、彼らとの連携も不明である。浅野家の藩士の記録を探ってみたいところである。

なお、大筒を持参したり、船の便を手配したり、かなり大掛かりな働きをしたにも拘らず、本藩・支藩とも『寛永諸家系図傳』や『寛政重修諸家譜』の浅野家の項には一言も述べられていない（この一揆鎮圧の記事自体がない）のは珍しい。なにか幕府に対して記述を憚られる不都合なことでもあったのであろうか。赤穂事件があったとしても直接この一揆事件とはつながらないし、他家とは別の事情があったのであろうか。確かに浅野藩は元和五年（一六一九）に前藩主福島正則の改易の後を受けて四十二万六千石で紀州から入封してきたが、このため福島家の遺臣の多くが浪人となり、この島原一揆に参加している状況をみると、複雑なものがあったかもしれない。後考を期したい。

注1『広島市史』第一巻（大正十一年一月・広島市役所）

「浅野氏時代（玄徳院）編年記事、３７８ページ。

注２『毛利四代実録』巻二十八の寛永十四年十二月二日状（『山口県史　史料編　近世１上』平成十一年九月　４０４～４０５ページ）

注３たとえば岡山池田藩の例（『吉備温故秘録』―『吉備群書集成』所収）があるが、別に戦後の処置と後日談についてまとめてみたい。

注４『広島県（双三群　三次市）史料総覧別巻』（昭和五十五年、広島県（双三群　三次市）史料総覧編集委員会）収。１１１ページ。